

博物館図書室における展示室等との連携に関する一考察 —〈ワンテーマ・ツアー〉内容報告とともに—

栗原智久*

目次

- はじめに
1. 利用者アンケートから
2. 連携について
3. 〈ワンテーマ・ツアー〉内容報告
おわりに

キーワード 博物館図書室 講座 セミナー ツアー MLA連携 内部連携

はじめに

江戸東京博物館図書室は江戸東京博物館の中の一施設である。歴史的にみた江戸東京、地域（エリア）的にみた江戸東京という視点から、広義にその歴史・文化に関する図書資料を収集する。また、それらを10年、100年……と、博物館の資料として保存していく専門図書館である。一方、江戸東京博物館図書室は公的な博物館の図書室として、自ずと開かれた感覚も持ち合わせている。例えば、研究者でなければ利用できないであるとか、紹介がなければ利用できないなどといった利用者の制限は設けていない。保存優先の観点から図書資料の館外貸出は行わないものの、館内閲覧・複写サービスには規定の範囲内ですできるだけ応えようという態勢をとっている。夏休みにはカウンター対応による「子ども歴史学習相談」を受け付けている。さらに、図書室の利用を促進するための一般向けの講座の類もたびたび実施している¹⁾。

“講座の類”は形式・格式ばったものではなく、気軽に参加できる内容を心がけている。このうちのひとつとして、図書室単独の利用だけでなく、展示室と図書室を結びつける利用例、展示資料と図書資料を結びつける利用例を考え、2007年から〈ワンテーマ・ツアー〉と題した体験型・参加型セミナーを開催している。これはツアーと銘打っていることからわかるとおり、毎回展示室・展示資料からテーマをひとつピックアップし、それをもとに図書資料、ときに映像作品、その他館内の諸事項と関連づけて、スタッフと参加者が一緒になって館内各所をまわるといふかたちで行っている。展示室から図書室へ。図書室から映像ライブラリーへ。「博物館全体でこんなことができるんだ、こんなに調べられるんだ」ということを（楽しみながら）体感してもらい、その動線を確認してもらう。

*東京都江戸東京博物館司書

本稿では、この〈ワンテマ・ツアー〉の報告とともに、博物館における展示室と図書室の、展示資料と図書資料の「連携」について考えてみようと思う。

まずは、実際に来館者が展示室と図書室をどのように利用しているかということからみてみることにする。

1. 利用者アンケートから

江戸東京博物館では来館者アンケートをとっている。ここに2011年9月度のアンケート結果がある。²⁾ 参考によると、全回答者中——任意のアンケートなので“全回答者”と言っても全来館者数の数%に過ぎないという事実があるが——「図書室を利用しなかった人」は38%という数字があがってきている。来館者は展示室を利用しないことはなくても、その目的や時間の関係などから図書室を利用しない、利用できないというはある程度予測できることで、この数字は妥当かあるいは少な目かかもしれず、驚くべきものではない。しかし、図書室からみたときに、これで全てがわかったというものでもない。すなわち、図書室の利用者はどうかということである。

そこで、同じ2011年9月に「図書室の中で」50人にアンケートをとってみた。³⁾ 単に入室している人ではなく、図書資料を利用している人を見定めて、男女別、年齢別、なるべく多岐にわたるように、しかし無作為に、手渡しで用紙を配布し、回収した。

結果、「展示室を利用しない人」は42%という思いのほか高い数字を得た。図書室のみの利用でわざわざ来館する人がいるという状況は、江戸東京博物館図書室の存在意義・存在価値に照らせば喜ばしく、ありがたいことである。が、翻ってみれば「展示室を利用した人あるいは利用予定の人」は58%ということになった。その内訳は展示室を利用した後に図書室に来たという人がほとんどで、⁴⁾ 2、3インタビューしてみると、展示資料をみて図書資料でさらに理解を深めることを目的に来室したとのことであつた。

図書室のみの利用者は、ただ単に本を読みに来たという人から江戸東京博物館図書室でなければ手にするのが難しい本を見に来たという人まで、いろいろと想定できる。さらに、この中には図書室と展示室を結びつけて使ってみたかったけれど、どうしたらいいのかわからなかったという人もいたと思われる。あるいは、先にあげた展示室を観覧しただけで図書室を利用しなかったという38%の来館者の中にも同様の人はいたはずである。

2. 連携について

〈ワンテマ・ツアー〉のようなセミナーは、まさにこのような人たちへのヒントになると思っている。企画・準備のため、図書室は日頃から展示室・展示資料に関する情報に精通しておく必要があるが、ここで思い浮かぶのが「連携」という言葉である。

博物館（展示室）と図書館（図書室）との連携。まず昨今よく目に耳にするのは「MLA連携」とい

う言葉である。MLAとは博物館 (Museum)・図書館 (Library)・文書館 (Archives) のイニシャルを取ったものであり、その連携は“本来の意味としては「デジタルネットワークを通じてMLA各機関が持つ“情報”を共有し、広義に流通させる」”こととされる⁵⁾。ここでのキーワードはデジタル (化) であり、各館が原資料をデジタルデータ (画像、映像、その他諸々) にしておけば、インターネットをはじめとしたデジタルネットワーク上でそれらを共有できるという。デジタル技術よりも標準・政策・手続きなどでの連携基盤・協力関係が重要であるという提唱もあるが、ひとまず単純に考えて今日インターネット上に情報を公開すればMLA連携はある意味ひとり歩きし、「自動的」になされていくとも考えられる。

ところが、もともと「図書館法」の中には“学校、博物館、公民館、研究所等と緊密に連絡し、協力すること”という一文がある⁷⁾。これも連携をあらわしているとみて間違いはない。“連絡”“協力”という言葉からだけでは具体的な方法まではわからないが、上記のようにデジタルを介してだけではない、人を介しての、あるいは場所を介しての連携というものが考えられ、ここは「能動的」に連携していくことが考えられる。

この能動的な連携というのが、なかなか難しい。理由は、ひとつにはどの機関とどこまで連携すればよいのか範囲がわからないということがあげられる。都道府県内レベルか。それとも、これより下位概念の市区町村内レベルか。あるいは、同系館間レベルで連携を試みるか。また、ひとつには誰のために連携するのがわかりにくいということもある。館同士自分達のためか。利用者のためか。

これらに照らして考えるに、〈ワンテーマ・ツアー〉は別の空間にある図書館と博物館が連携するのは違い、博物館の中の一施設の図書室 (L) が図書資料と展示室 (M)・展示資料とを結びつけて行おうというものである。MとLが同一空間で連携する——いわば「内部連携」とでも言うべきものである。博物館図書室からみたとき、展示室・展示資料に精通しておくことでテーマが抽出できれば、何よりそれをもとに手っ取り早く連携を考えることができる。このことは、MLA連携の一形態としても着目すべき点ではないかと思う。

〈ワンテーマ・ツアー〉はこれまでに5回を数える。ひとまずこれを節目として、各回の内容について以下にまとめる。

3. 〈ワンテーマ・ツアー〉内容報告

第1回「明治・大正の東京タワー 浅草十二階」

日時 2007年2月25日 (日) 13:00~15:30

対象 一般 (大学生以上)

資料 常設展示室: 凌雲閣 (浅草十二階) 1/10復元模型、「凌雲閣機絵双六」1890年 (87102202)⁸⁾、「大日本凌雲閣之図」1890年 (89200827)

映像ライブラリー: 「お雇い外国人と東京3 バルトン」 (92920131)

図書室: 『浅草区史 上巻』1914年 (1968年に復刻) C3631/2913/20-1⁹⁾ (87500160)、『東京名所図会

浅草公園・新吉原之部』陸書房 1968年（原本は風俗画報増刊『新撰東京名所図会』1897年）
2913/83/2 (91604181)、『明治ニュース事典 IV』毎日コミュニケーションズ 1984年 2106/311/4
(89500362)、『お雇い外国人⑮建築・土木』鹿島出版会 1976年 2106/323/15 (87500570) ほか



配布資料より

概要

浅草十二階、正式名称凌雲閣。ツアーでは、その「眺望」と「エレベーター」と「設計者」にこだわった。

まず、5階常設展示室で縮尺復元模型と、その周辺展示で錦絵「凌雲閣機絵双六」や石版画「大日本凌雲閣之図」などを観覧。とくに日本ではじめて設置されたというエレベーターが錦絵・石版画でどのように描かれているかを確認した。

5階から地下1階へ移動。

地下1階映像ライブラリー（現在は7階に在り）で「お雇い外国人と東京3バルトン」を鑑賞。バルトンは英国人。帝国大学工科大学の教師に招かれ、上下水道建設などに功があったが、何より浅草十二階を設計したとされる人物で、その関連からとくにこの作品をみる時間を設けた。

地下1階から7階へ移動。

7階図書室に入る前に、浅草十二階の展望所からみる眺望は、高さのことで言えば江戸東京博物館7階からのそれとさほど変わらないことを説明。また、江戸城天守閣からの眺めも、（戯れに）初代ゴジラの見線も、この程度の高さであったといった話を交えながら、実際に窓から眼下を見下ろして体感してもらった。

図書室では、『浅草区史 上巻』の口絵に収められている浅草十二階からの（本物の）眺望写真を確認。また『東京名所図会 浅草公園・新吉原之部』『明治ニュース事典 IV』では、エレベーターのことが書かれた記事・記述を確認。『お雇い外国人⑮建築・土木』からは、映像作品に引き続きバルトンを通して浅草十二階をみることができた。ほかにも浅草十二階、エレベーターのことをとりあげた明治の写真集の類、事物起源辞（事）典など、関連本については枚挙に暇がない。

参加者は一般の方から明治時代の建築物に興味のある方、バルトンを研究しているという方までいら

したが、とくに垣根もなく、最後に全員で感想を出し合った。

第2回「運賃いくら？ 人力車・円タク・輪タクに乗って」

日時 2008年1月22日(火) 14:00~16:00

対象 一般(大学生以上)

資料 常設展示室：人力車(90360001)、円タク(フォード)(92200943)、輪タク(91005548)

図書室：『値段史年表 明治・大正・昭和』朝日新聞社 1988年 3378/17/89 (92500030)、『物価の世相100年』読売新聞社 1982年 3378/2/82 (87505152) 『明治ニュース事典Ⅰ』毎日コミュニケーションズ 1985年 2106/311/1 (89500359) ほか



配布資料より

概要

常設展示室に展示されている個人乗り陸上交通の「運賃」をテーマにした。ちょうどツアー準備中の2007年末、東京のタクシーの初乗り運賃が2 km 710円に改定されたので、こちらの情報も盛り込んだ。併せて物価・貨幣価値についても考察した。

まず、1階学習室で古今の個人乗りの陸上交通手段にはどのようなものがあるかを確認した(人力車・円タク・輪タク・タクシー)。

1階から5階へ移動。

5階常設展示室では、学習室での確認をもとに、展示されている人力車・円タク・輪タクの実物を観覧した。

5階から7階へ移動。

7階図書室では、朝日新聞社の値段史シリーズをはじめとして、事物の値段の変遷が具体的に調べられる本を選んで確認した。

例えば、人力車は明治5~6年、1里乗って6銭2厘というデータがある。1里は約4 km。10厘は1銭、100銭は1円である。これらに照らすに、木村屋総本店のあんパンの値段でみてみると、明治7年、

5厘というデータがある。2011年現在の木村屋総本店のそれは、インターネットで調べてみると140円。5厘が140円ということは、1厘は28円という目安になる。ゆえに、人力車は約4km乗って62厘、すなわち今日的には1,736円と算出でき、今日のタクシーに比べてちょっと高めという感覚である。しかし、スーパーやコンビニエンスストアで売られている袋に入った木村屋のあんパン（菓子パン）の値段は約100円であり、これをもとにすると1厘は20円、人力車に約4km乗って1,240円という換算になる……あくまで目安であるが、万事このようなかたちで見て行って、参加者においてはなるほどと思われるところがあったようだ。

第3回「展示室のその人 どんな顔？」

日時 2009年7月28日（火）13：30～16：00

対象 小中高生（親子参加可）

資料 常設展示室：太田道灌像（北区静勝寺原蔵）（89900185）、徳川家康坐像（港区芝東照宮原蔵）（90900006）

映像ライブラリー：「お雇い外国人と東京1 モース」（92920126）

図書室：人物辞典類・肖像辞典類・個人の伝記 など

概要

夏休み子ども向け企画として開催した。

事前に常設展示室に名前のある人物（キャプション中を含む）をピックアップ。大岡忠相・喜多川歌麿・歌川広重・葛飾北斎・三井高利・市川団十郎・鶴屋南北など、著名で名前を知らない人はいないと思われる人物を選んだが、これに限らず調べたい人物があればその場であげてもらった。ツアーに出る前に1階学習室でその顔（肖像）が思い浮かぶかどうかヒアリング、ほとんどわからないということでスタートした。

1階から6階へ移動。

6～5階常設展示室を見学。展示されている太田道灌像や徳川家康坐像など江戸を代表する「顔」を観つつ、名前だけ出てくる人物など、チェックしていった。

5階から7階へ移動。

7階図書室では、チェックした人物の肖像を人物辞典・肖像辞典の類の中にさがして、模写したり、必要に応じてコピーをとるなどした。

映像ライブラリーでは、常設展示室に展示のあるモースコレクションとのつながりからモースの顔を見てみようということで、「お雇い外国人と東京1 モース」を鑑賞した。

7階から1階へ移動。

学習室に戻り、集めた情報をもとに、江戸東京博物館で使用している「資料情報カード」をベースにしたワークシートにまとめ、最後は参加者に簡単な発表までしてもらった。

ちなみに、このツアーは2009年2月24日～3月22日会期の企画展「えどはくでおさらい！江戸時代教科書で見たあの人、この絵」¹⁰⁾にインスピレーションを受けて開催したものであった。

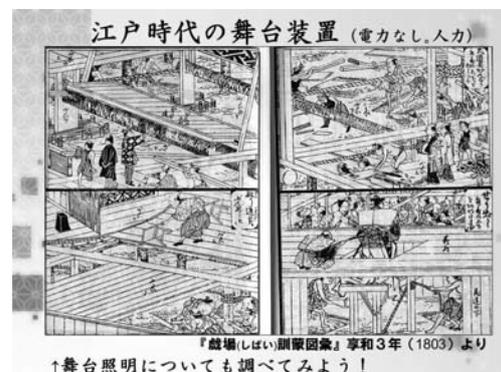
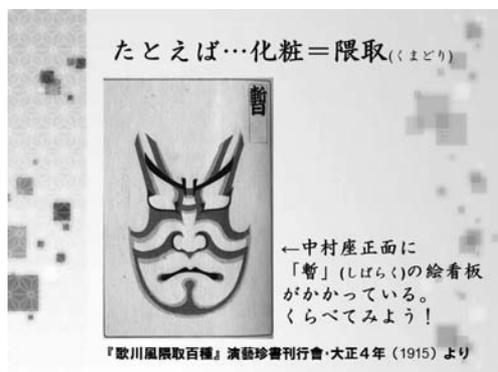
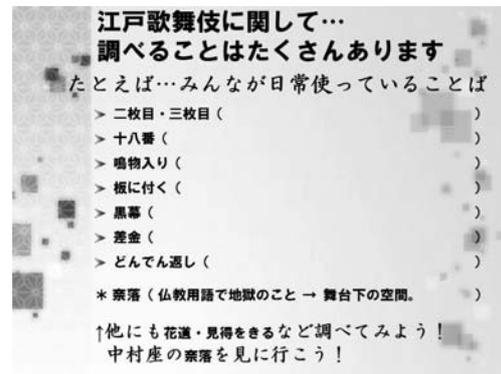
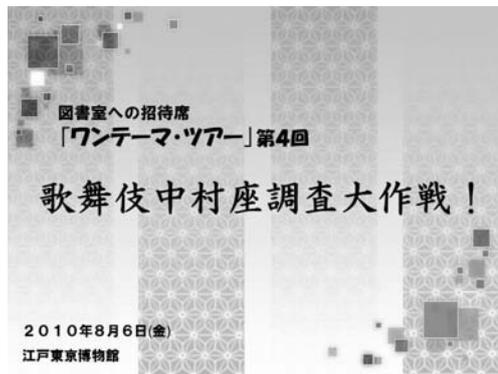
第4回「歌舞伎中村座調査大作戦！」

日時 2010年8月6日(金) 14:00~16:00

対象 小中高生(親子参加可)

資料 常設展示室: 中村座復元模型、「助六」舞台模型 ほか

図書室: 『歌舞伎事典』平凡社 1983年 7740/1/91 (91603163)、『絵本 夢の江戸歌舞伎』岩波書店 2001年 7745/L12/001 (02601853)、『江戸のあかり』岩波書店 1990年 2105/646/90 (93601514)、『戯場訓蒙図彙』国立劇場 1969年(原本は1803年) 7740/27/3 (90400931)、『歌川風隈取百種』演藝珍書刊行會 1915年 7746/19/15 (95401687) ほか



配布資料より

概要

常設展示室最大復元模型である中村座への内部潜入をふれこみに、とくに電気のなかった時代の舞台照明・舞台装置に思いをめぐらせた。

事前に1階会議室で①歌舞伎関連言葉 ②隈取 ③江戸時代の舞台照明・舞台装置 といった事柄をポイントとして掲げておいてスタートした。

1階から5階へ移動。

5階常設展示室では、「奈落」の模型を観覧、人力の舞台装置として確認。また、絵看板「暫」・舞台模型「助六」各々の隈取を照らし合わせた。さらに、江戸時代、提灯などのあかりは展示模型のように電球ではなく蠟燭であったということ、興行は昼間が基本、『歌舞伎事典』の“彩光は東西両棧敷の上部に障子を入れた〈明り窓〉から行われた”という部分を紹介し、舞台照明はままたまらなかつたのであ

うことを想像してもらった。

5階から7階へ移動。

7階図書室では、歌舞伎に関する本の多さを実感してもらいながら関連図書資料をピックアップ。夏休み子ども向け企画で、親同伴とはいえ小学生の参加もあったので、舞台照明に関しては『絵本 夢の江戸歌舞伎』『江戸のあかり』といったとくにわかりやすいものからイメージをつかんでもらい、あらためて展示模型の様子と比べてもらった。舞台装置に関しては『戯場訓蒙図彙』の絵の中に、展示室で観た舞台下人力による「せり出し」や「回り舞台」を確認。原本は江戸時代に描かれた絵ということで、参加者の多くはそのような古い絵を図書資料から見られることにまず驚いていた。

第5回「西郷さん大久保さん木戸さん、お家はどこ？」

日 時 2011年10月30日（日）13：30～15：30

対 象 一般（中学生以上）

資 料 常設展示室：東京ゾーン入口（朝野新聞社模型入口）付近各資料（西郷隆盛関係・大久保利通関係・幕末写真パネルなど）、鹿鳴館1/25復元模型 ほか

図書資料：『5千分の1 江戸—東京市街地図集成』柏書房 1988年 2913/L191/1（88650520）、『古地図ライブラリー4 江戸から東京へ 明治の東京』人文社 1996年 2910/211/4（97500379）、『中央区沿革図集 [日本橋篇]』東京都中央区立京橋図書館 1995年 M3633/CH-2/L2-2（95600223）、『復元・江戸情報地図』朝日新聞社 1994年 2913/L733/94（94603450）ほか



- ・西郷隆盛（薩摩出身）
明治10年9月、西南戦争で戦死。
- ・大久保利通（薩摩出身）
明治11年5月、紀尾井坂の変で暗殺。
- ・木戸孝允（長州出身）
明治10年5月、西南戦争のさなか京都で病死。

維新三傑

…3人そろって東京に在ったのは明治4年2月～明治6年10月の中のわずかな期間。

- * 明治4年7月、廃藩置県。
- * 明治4年11月～明治6年、岩倉使節団。
- * 明治6年10月、政変。

明治元年=1868年

- ・「東京大繪圖」明治4年
- ・「活券地圖」明治6年
- ・「明治東京全圖」明治9年

明治初年の地図類から

- 會 西郷さん
 - ・井上馨（長）
- 會 大久保さん
 - ・西郷従道（薩）
 - ・有栖川宮（公）
 - ・三条実美（公）
 - ・勝海舟（幕）
 - ・徳川家達（幕）
- 會 木戸さん
 - ・山県有朋（長）

まわりの人々

概 要

維新三傑と称される西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允。3人がそろって東京に在ったのはほんのわずかな期間である。明治4年に西郷が上京。同年7月に廃藩置県が断行され、同年11月には大久保・木戸は岩倉使節団の副使として外遊へ。それぞれに帰朝するのは明治6年だが、同年10月の政変で西郷は下野、鹿児島に帰ってしまった。明治10年2月に西南戦争勃発。戦争さなかの同年5月に木戸は病死、同年9月に西郷が戦死して西南戦争は終結したが、翌明治11年5月に大久保も紀尾井坂の変で暗殺された。1階学習室では参加者との基本情報を確認、ツアーをスタートした。

1階から5階へ移動。

5階常設展示室の江戸から東京への移行の中で、西郷・大久保は展示資料やキャプションなどに散見している。つながりで、幕末の武家屋敷の写真パネルや鹿鳴館縮尺復元模型の中の武家屋敷の門は何なのかといったことをとりあげ、これらと併せて観覧した。

5階から7階へ移動。

7階図書室では、ツアーのタイトルに基づき、西郷・大久保・木戸の住居が確認できる明治初年の地図類があるかどうか、本をさがした。結果、『古地図ライブラリー4 江戸から東京へ 明治の東京』所収の明治4年「東京大繪圖」、『中央区沿革図集 [日本橋篇]』所収の明治6年「沽券地圖」、『5千分の1 江戸—東京市街地図集成』所収の明治9年「明治東京全圖」などをピックアップした。

7階から1階へ移動。

学習室に戻り、参加者全員で本を広げて確認。まず「沽券地圖」で日本橋蛸殻町一丁目に“西郷隆盛”の名前を見つけた。ついで「東京大繪圖」「明治東京全圖」で現在の国会議事堂と内閣府の間辺りに“大久保利通”の名前を、また現在の靖国神社近くに“木戸孝允”の名前をさがし出した。各々近くに旧幕府や新政府薩長閥の中で著名な人物の名前がみられるかどうかも確認。すると西郷の近くには井上馨、大久保の近くには西郷従道、溜池を挟んで勝海舟・徳川家達、木戸の近くには山県有朋というように、ほかにもたくさん名前が認められた。

展示室で併せて観た武家屋敷の写真は三田の島原藩屋敷で、維新後この地は慶応義塾になって現在に至る。また、鹿鳴館の武家屋敷の門は内幸町の薩摩藩屋敷のそれをそのまま遺したもので、鹿鳴館解体後も国宝として存在したが（写真をスライドで紹介）、空襲で焼失した。これらのことも当館図録『参勤交代』『模型でみる江戸・東京の世界』を参考にして紹介した。

現代の地図との比較で欠かせないのは『復元・江戸情報地図』である。

今回のテーマは、維新三傑を軸に展示資料を観覧、それに関連して明治初年の地図類を見ることであった。さらに、この時代の直前・直後の展示資料（武家屋敷や鹿鳴館）と結びつけて見ることに参加者は積極的であった。

おわりに

具体的な連携例と連携内容を報告の中で示してみた。テーマを持たない博物館はない。〈ワンテーマ・

ツアーのように展示室と図書室、展示資料と図書資料の連携を企図することは、如何なる博物館図書室でも可能なことではないか。

課題としては、

- ・常設展示だけでなく特別展示・企画展示に関連したタイムリーなツアーの催行。
- ・展示替えなどの予定の事前確認。

といったことがあげられる。前者は今以上にスタッフのマパワーを伴うことになる点において難しさがあるが、要は展示室と図書室がセクショナリズムに陥ることなくふだんから交流・情報交換しておく、それが大切である。蛇足ながら、そのほか連携とは直接関係しない課題として、

- ・図書室へ巡って来た参加者がグループ閲覧できるスペースの設置。
- ・ツアーに必要な不可欠な図書資料を参加人数に見合うだけ複数冊用意。
- ・同じテーマでのツアー再企画の検討。

といったことがあげられる。

連携の方法はほかにも考えられる。例えば、展示に合わせて図書室の展示ケースを使って「関連図書資料展示」を行う。また、開架に「関連図書資料コーナー」を設ける。これらはオーソドックスな方法と言えよう。＜ワンテーマ・ツアー＞はこれらより能動的な方法と言えるかもしれない。ともあれ、図書室業務の合間に「最小限の時間と労力で効果的に」を心がけて、展示室と図書室、展示資料と図書資料を結びつける（連携のポイントとなる）テーマを抽出していくこと。いずれにおいてもそれは変わらない。

最後に。「なぜ連携か？」と問われれば——博物館図書室からみれば——「もったいないから」と答えよう。展示を観て、疑問に思ったことや関心を持ったことなどをさらに調べたいというとき、そして調べるための情報源を「本」に求めるといふとき、一般には博物館から次は図書館に行って（場所を移して）みようとするかもしれない。しかし、博物館の内部に図書室があるなら、博物館と図書館を切り離して考えることはない。調査者にとって図書室があるのに気づかない、利用しない、博物館全体を使いたいのはどうしたらいいのかわからないというのはもったいないし、館にとって図書室を有しているのにそれが利用者のニーズに応えられるだけの施設になっていないというのはやはりもったいない。私事、例えば県立レベルの大きい博物館を視察するときには極力その図書室までチェックすることを心がけているが、中には図書コーナーと言おうか、図書室と呼ぶには少々難のある施設に出会うこともある。これは規模のことだけを言っているのではない。実地調査についてまたまとめることができる別の機会があればと思うが、博物館図書室は博物館あつての施設であり、連携のことから言えば、展示で考えられるいろいろなテーマに応え得る、結びつく図書資料を収集・設置することが最低限必要である。如何なる博物館図書室もそうあつてほしい。それが館ごとの差別化につながるものであり、博物館図書室の存在意義のひとつはこういったところにあると思っている。

【註】

- 1) 2007年秋から2011年新春までの各期、年4回、「図書室への招待席」という枠の中で図書室・図書資料に関連した内容の講座・セミナーを実施。ほかにも「古文書講座」オプションとしての古文書マイクロフィルムの利用案内、また和綴じ本作製のワークショップなどを実施。
- 2) 小中高生の夏休み利用（来館）が終わった直後の月であり、常設展のみ（特別展と特別展の間）の期間を含む。
- 3) 13:00~15:00（図書室利用前、利用後に展示室が利用できる時間帯）でアンケート採取。結果は下表のとおり。

図書室利用者アンケート:同日の展示室利用について (単位:人)

2011	利用した(利用予定)	利用しない	展示室
9.17(土)	1(5)	4	常設展のみ
9.18(日)	5(1)	4	常設展のみ
9.20(火)	3(0)	3	特別展あり
9.21(水)	3(0)	1	特別展あり
9.27(火)	6(0)	4	特別展あり
9.28(水)	4(1)	5	特別展あり
合計	29(58%)	21(42%)	

- 4) 29人中22人。
- 5) 田良島哲「博物館の情報環境とMLA連携」(『MLA連携の現状・課題・将来』水谷長志編著 勉誠出版 2010年 p.78-79)
- 6) 元米国図書館協会会長マイケル・ゴーマン氏の指摘であり、田窪直規氏が「MLA連携の動向とこの連携を捉える3つの視点」(『MLA連携の現状・課題・将来』水谷長志編著 勉誠出版 2010年 p.88)と「博物館・図書館・文書館の連携、いわゆるMLA連携について」(『図書館・博物館・文書館の連携』日本図書館情報学会研究委員会編 勉誠出版 2010年 p.9)の2論文等で紹介。
- 7) 「図書館法」第3条9 (最終改正 平成20年6月11日)
- 8) ()内8桁数字は江戸東京博物館での「資料番号」。
- 9) 図書資料につけた / による3分割数字記号は江戸東京博物館での「請求記号」。
- 10) 『東京都江戸東京博物館紀要』第1号(2011年)p.83-111に「企画展「えどはくでおさらい!」開催報告」を所収。